

概 報

553.499 : 550.85 (524)

北海道十勝国ユーヤンベツ水銀鉱床附近地質鉱床調査報告

梅 本 悟 五十嵐 昭 明

ユーヤンベツ水銀鉱床は日高系粘板岩^{註1)}を母岩とする浅熱水性脈状鉄鉱床で、N70°E方向のものが主体をなす。なおこれを覆う河岸段丘の一部にも鉄化作用が及んでいる模様で、少なくとも、一部は非常に新しい時期の生成に係るものと推定される。

然別鉄鉱床^{註2)}は、閃緑岩の進入に伴って、その周

辺に生成された小規模な不規則塊状磁硫鉄鉱床で、小規模であるが、そのうちでも、閃緑岩との接触部に近いホルンフェルス中に期待がもてる。

註1) 日高山脈の東側、シーシカリベツ川本流流域の一部に位置する。

註2) 然別川支流のオソウシュ川上流に賦存する。

553.61 : 550.85 (521.44)

福井県鬼ヶ嶽陶石鉱床

安 齋 俊 男

福井県丹生郡下および武生市内の陶石鉱床については、塚脇祐次の調査があつて、鉱床および鉱石品位について詳細に報告¹⁾されている。今回、この地域のうち、塚脇の未調査の鬼ヶ嶽鉱床(鉱業権者丹生郡宮崎村、田中伝外1名)の概査を行なつたので、その大略について述べる。

(1) 位置 鉱床は武生市鬼ヶ嶽にあつて、武生市街の西方約7km、鬼ヶ嶽(532m)の北西斜面に位置する。鬼ヶ嶽の北麓には県道があつて、開発に際しての運搬関係は便利である。

(2) 地質鉱床 鬼ヶ嶽周辺の地質は、石英粗面岩および同質の凝灰岩からなり、岩脈状安山岩がこれを貫ぬいている。

石英粗面岩と凝灰岩とは水平に近い互層状をなすようである。石英粗面岩は灰白色緻密質で肉眼的に斑晶は認められない。

凝灰岩はきわめて種々の粒度のものがあつて、ときには珪化した石英粗面岩礫を含む礫岩状のものが存在する。

鉱床はこれらの岩石化したものであるが、今回の概査範囲内では、鬼ヶ嶽北西麓の谷の低地を除いて、中腹以上は広範囲に陶石化しているようである。過去において一部採掘を行なつた3号、5号の切羽を除いては全面的に露出不良で、鉱石品位分布の詳細は明らかでないが、一般に、緻密な石英粗面岩と、とくに粗粒な凝灰岩または礫岩の部分は陶石化作用を受け難く、このような部分

が層状またはレンズ状をなして原岩のまま残っているのがみられる。しかしこのような部分の量は全体としては少量である。

陶石化の進んだ部分においても、原岩の相違によって、緻密均質なものから粒状を呈するもの、さらに、粘土質部が斑状を呈するものなど、多様の見掛けのものがある。陶石化した部分は今回の調査範囲だけでも鬼ヶ嶽の北西斜面一帯で、少なくとも、北東-南西方向に500m以上、高低差200m以上あり、この部分はほとんど原岩は脱色して白色、軟質の鉱石になっている。

主要不純分である鉄分は、褐鉄鉱の焼けとして割れ目に沿つて薄層をなし、かなり多量に存在する。また、赤褐色の斑点をなしていることがある(探鉱坑内)。しかし少なくとも地表においては硫化鉄の形で存在することはない。

現在みられる3号、5号の切羽が、この鉱床中のとくに良質部であるといえないので、広範囲に陶石化した、この地域一帯のうち、陶石採掘に最も適する狭義の「鉱床」の把握は、今後の精査にまつほかはない。

しかし3号、5号の切羽および、その下部の坑道の様子からみて、白色磁器に適する良質鉱石は必ずしも多くなく、またこのような鉱石の存在する部分でも、選鉱実収率は、せいぜい30%程度にとどまるものと考えられる。

(3) 鉱石 塚脇の報告にもみられるが、本地域の鉱石は、石英・絹雲母を主成分とするいわゆる陶石であつ

て、化学分析結果も、天草陶石などに似ている。しかし、陶磁器原料は、多くの物理的、化学的諸性質が試験されねばならず、また使用者によつて要求する品位が異なるので、個々の鉱床について充分試験研究のうえ、使用さるべきものである。しかし一般的にいつて本鉱床のうちごく良質の部分は白色磁器原料として充分使用可能であると考えられる。

前述のように、良質の部分があまり大量にまとまって存在することは期待できないので、陶磁器原料としては不適当な廃石の利用が、本鉱床の開発上最も重要な点であつて、瓦用あるいは白色セメント用粘土としての利用

研究が望ましい。

(4) 意見 鬼ヶ嶽陶石鉱床は量的にはかなり大きなもので、今後の精査・探鉱に期待がかけられるが、現在までに認められるところでは、高級陶磁原料に適する部分はあまり多くないようである。

白色セメント・瓦用等の原料として大量の需要があれば、高級陶磁器原料用鉱石の採取も容易となり、開発の道が開けよう。

文 献

- 1) 福井県：地下資源の全貌，1951～1953

553.31 (524)

北海道天塩・北見地方川砂鉄鉱床概査報告

梅 本 悟 渡 辺 芳 次

北海道枝幸郡中頓別町・同郡枝幸町・天塩郡天塩町、および中川郡美深町地内に、川砂鉄が賦存するといわれていた。しかし採取試料についての分析値が、従来1, 2報告されているのみで、その他については全く不明であつたので、それらの賦存状態を概査した。その結果、それらの河川はいずれも、かつて砂金あるいは砂クロム採取を行なつた所で、水洗精鉱を得る際、ごく少量の砂鉄が随伴してきたにすぎず、したがつて砂鉄としては原砂中の含有率も全く取るに足りないもので、資源的に無価値であることが明らかとなつた。

水洗精鉱を鏡下で検するに、枝幸地区のものが最も粒度が粗く、平均径 0.4mm 程度を示し、美深地区のもの

が最も細かく 0.08mm 程度を示す。各地区のものを通じ磁鉄鉱・チタン鉄鉱およびクロム鉄鉱は互いに単体分離(一部は固溶体?)をなして存在し、格子状共生の粒子は全く見当たらない。各地区で採取・調製した水洗精鉱の分析結果から、磁鉄鉱・チタン鉄鉱・クロム鉄鉱の3者の百分比を算出し、これを三角図表にプロットすると、地域的特性がよく現われる。すなわち、中頓別・松音知地区は磁鉄鉱・クロム鉄鉱を主とするのに反し、美深地区はほとんどチタン鉄鉱のみからなる。

詳細については「1955年未利用鉄資源第2集」に報告してある。